

ヨーガ行者の造化作用 (yogi-nirmāṇa)

戸 田 裕 久

ヒンドゥー教全般にわたる或る優れた概説書に¹⁾、カシミール・シヴァ派に特徴的な見解として、シヴァ神は「画板や素材を集めることなしに世界という絵を描く」²⁾ すなわち「質料因や動力因を何ら用いることなく行われる創造」の主体であると考えられ、それと同様の例として「何ら素材を用いずに意志だけで物を生み出すヨーガ行者」を挙げている、という記述がある。これは同派の諸文献において〈ヨーガ行者の造化作用〉(yogi-nirmāṇa)³⁾ という名で論じられている事柄を指す。そのような超常的現象が喩例として通用しうるほどに、千年前のインドには偉いヨーガ行者が大勢いたということか。それとも、やはりシヴァ派特有の奇抜な発想によるものなのか。それならば、そこで何が意図されているのか。

『ヨーガ・スートラ』第三章には、綜制 (saṃyama) すなわちヨーガの八支の内での内的三部門 (dhāraṇā, dhyāna, samādhi) に熟達したヨーガ行者に備わるとされる様々な超自然力 (vibhūti) が列挙されている。就中、造化作用に関連するのは、物質元素の支配 (bhūtajaya)、およびそれにもとづく八種の主宰神力 (aiśvarya) であろう。その八種とは、身体の微細化、軽量化、巨大化、遠隔到達 (指先で月に触れるなど)、随意行動 (地中水中に出没自在など)、物質元素および物質元素から構成された物の支配、それらの生起と消滅と排列の統御、物質元素の諸作用を恣にすることによる欲望の充足を可能にする力である⁴⁾。このようにヨーガ学派においても、ヨーガ行者が意のままに物を作り出す力を持ちうると説かれている。ただしそれは、あくまでも既存の物質元素およびそれから構成された物質を意志の力で操作することにより成立するのであって、まったく何の素材もないところから物を生み出しうると主張しているわけではない。なお、ヨーガ実修の過程で種々の超自然力が自ずと得られるとはいえ、それはヨーガの極点でも目的でもなく、むしろ障害になりかねない⁵⁾ という記述がある点にも注意を促したい。

Utpaladeva は IPK (*iśvarapratyabhijñākārikā*) において「認識主体の外部に対象が存在する」という説を批判した上で、持論のシヴァ一元論を提示して、『精神原理を本質とする神のみが、[自身に] 内在的に存続している質料因ならざる⁶⁾

事物対象群を、意志の力によって外的なものとして現出させうる。あたかもヨーガ行者がそうするように』⁷⁾と述べている。

また、神があらゆる現象の行為主体であることを述べて、『彼 (主宰神) のみが無限の力を有するゆえに意志の力によって「このような」「これら」「というように」諸々の存在物を〔個別の特定化して〕顕現させている。まさにこの行為 (kriyā) こそが、彼 (主宰神) の造化主体性 (nirmāṭṛtā) である』⁸⁾と言う。

そして、『ヨーガ行者たちに関しても、その意志の力によって、粘土や種子が無くとも、それぞれ定常的な自分にとって効果的作用をもたらすもの (実在物) である壺などが生ぜられる』⁹⁾と、神の行為の類例として *yogi-nirmāṇa* を挙げている。なお、Abhinavagupta はそれに対する註釈 IPV¹⁰⁾において、これを指して「全ての論者にとって周知の具体的事例」と述べている。

このようにカシミール・シヴァ派においては、*yogi-nirmāṇa* は、現象世界の全てを根源的に成り立たせている真の行為主体たるシヴァ神の行為と相似した構造をもつと考えられており、そして、その *yogi-nirmāṇa* という現象は、既に一般に周知の事柄であるから、幽玄なるシヴァ神の行為についての理解を助けるための喩例として或る程度は有効であると見なされていたのであろう。

しかるに、当シヴァ派の考える *yogi-nirmāṇa* は他学派のそれと構造的に明らかに異なる。Abhinavagupta は自派の説く *yogi-nirmāṇa* が質料因 (upādāna) なしに成立することをこう述べている：『万物に存する諸々の極微原子がヨーガ行者の意志によって即座に凝集せられて結果を形成するであろう』というようには言えない。なぜなら、これ (他学派のこの見解) は [*yogi-nirmāṇa* できさえも] 世間の常識的な原因性 (因果関係) を超越しないことを成立させるために指定されている [事柄にすぎない] から』¹¹⁾。ここで批判対象として想定されているのは、おそらく先に見たヨーガ学派の説く「物質元素の支配」であろう。

また彼は別の異論を批判してこう言う：『ヨーガ行者は [壺の生起に必要な条件が揃っている場合に] 壺を造化する者 [になりうるのだとするならば]、陶工によって知悉されている要因総体の総ての獲得完備を先行要件として壺を結果させる者である [普通の] 陶工と何ら変わりなくなってしまう』¹²⁾。

つまり、もしも *yogi-nirmāṇa* の成立のために質料因ないしは種々の補助因を含む要因総体が必要であるとするならば、それは壺の製作などの世間の通常の造化作用と本質的に異ならず、両者の間には程度の差しかないことになる。しかしそれでは、敢えて *yogi-nirmāṇa* を神の行為の類例として提示した意味がなくな

ってしまう。さらには、意志の力のみで造化するという神の行為についての理解を助けるために用いたこの喩例によって、皮肉にも神の行為の偉大さが不当に低く評価されるという事態すら招きかねない。翻って考えれば、神の行為の類例として提示されたものである以上、当シヴァ派にとっての *yogi-nirmāṇa* はやはり「何ら素材を用いずに意志だけで物を生み出す」作用であり、ヨーガ学派において想定されている以上に、その超常性を先鋭化せられた概念であると言えよう。

このように、*yogi-nirmāṇa* が世間通常の造化作用と本質的に異なる特異な作用であることが明らかになったが、それに伴って新たな問題が浮上する。ヨーガ行者は神ならぬ身であるのに、*yogi-nirmāṇa* においては神の主宰する自然の法則を逸脱した所業がなされることになる。そのとき、ヨーガ行者は神を超えた者となっているのか。そのヨーガ行者が神になるのか。このように連想した場合、先程とは逆に、神の行為の偉大さに比して *yogi-nirmāṇa* を不当に高く評価してしまう危険性がある。シヴァ神の主宰するこの世界の秩序の中に *yogi-nirmāṇa* をどう位置づけるかが問題である。

Abhinavagupta の次の言に手がかりがある：『偉大なる神は自然法則 (niyati) を遵守 (anuvartana) または違反させる (ullaṅghana) 極めて堅固な自発性 (svāntantrya) を有する。自然法則を遵守する者にとっての自発性は周知の世間的通常の (laukika) 因果関係において [発揮されるの] であり、他方、それ (自然法則) を違反することに専注している者にとっての [自発性] は専らヨーガ行者に見られるものとして周知の超世間的超常的な (lokottara) [因果関係] において [発揮される]』¹³⁾。すなわち、*yogi-nirmāṇa* は自然法則に反する超常的な因果関係により成立する諸現象の範疇にその代表例として組み込まれる¹⁴⁾。そして一見、神の秩序を乱しているかのような *yogi-nirmāṇa* であるが、それを成り立たせているのも、実は神の意志であるというのである。これにより、神の行為とその喩例 *yogi-nirmāṇa* との平行関係は保たれる。のみならず、神は、自身の地位を脅かしかねない異形の存在さえも自らの中に収めてしまうほど寛容な、恩寵をもたらす者として輝き増すこととなる。それこそがシヴァ教徒の尊崇する神であり、この恩寵の神の中に、*yogi-nirmāṇa* は働く場を与えられているのである。

以上により、冒頭に掲げた概説書の記述の正しさが検証されたであろう。

1) R.G. Bhandarkar, *Vaiṣṇavism, Śaivism and Minor Religious Systems* (BOKI, Poona, 1913), p. 185. R.G. パンダルカル著、島岩+池田健太郎訳『ヒンドゥー教 ヴィシュヌとシヴァの宗教』(せりか書房, 1984年) 376頁。

- 2) バンダルカルはこれを Vasugupta に帰せられる偈の文言として紹介しているが、より膾炙していたと思われるのは, Bhaṭṭa-Nārāyaṇa の次の偈であろう。nirupādān-asambhāram abhittāv eva tanvate, jagac citraṃ namas tasmai kalāślāghyāya śūline (*Stavacintāmaṇi*, 9). これは, IPV 2, 4, 10, vol.2, p.173, また, *Sarvadarśanasamgraha*, BORI ed., viii, 115-116 に引用されている。武田耕道 [1973] 「Mādhava の著作手法—Sarvadarśanasamgraha, 第7章 Śaivadarśanam 及び第8章 Pratyabhijñādarśanam の場合」(印仏研, 21-2) 941頁。
- 3) nirmāṇa は漢訳仏典では「化作」「変化」などと訳されており, 仏・菩薩が衆生を教化するために現する「化身」「化人」, また, 自ら妙楽の境地を創り出す神々およびその住処を指す「化楽天」という場合の「化」がそれである。但し, この語は日常的な「作る」という意味で普通に用いられ, ここでもその域を出ないであろう。
- 4) Vyāsa's *Yogasūtrabhāṣya* ad *Yogasūtra* 3, 44-45.
- 5) *Yogasūtra* 3, 37. 仏教でも, 神通力 (abhijñā, ṛddhi), 悉地 (siddhi) に徒らに傾倒, 拘泥, 濫用した場合には, 成道の障害すなわち魔に属するものと見なされる。
- 6) 尚, 東北大学の村上真完博士と村上幸三氏より, 意志の力も質料因ではあるまいか, という趣旨の御指摘を賜った。再認識派の体系は自発性 (svātantrya), 志向作用 (vimarśa) といった神の意志に関わる概念を中軸として構築されているので, 意志をどう捉えるかは重要な問題である。御教示を仰ぎつつ, 改めて検討したい。
- 7) cidātmaiva hi devo 'ntaḥsthitam iccāvaśād bahiḥ, yogīva nirupādānam arthajātam prakāśayet (IPK 1, 5, 7).
- 8) eṣa cānantaśaktitvād evam ābhāsayaty amūn, bhāvān icchāvaśād eṣā kriyā nirmāṭṛtāsyā sā (IPK 2, 4, 1).
- 9) yoginām api mṛdbije vinaivecchāvaśena tat, ghaṭādi jāyate tattatsthiraśvārthakriyākaram (IPK 2, 4, 10).
- 10) *Īśvarapratyabhijñā-vimarśinī* of Abhinavagupta, ed. by K.A.S. Iyer and K.C. Pandey (Princess of Wales Saraswati Bhavan, 1938, 1950).
- 11) sarvagatāḥ paramāṇavo yogicchayā jhaṭiti saṃghaṭitāḥ kāryam āraṇsyante iti, yata etat lokaprasiddhakāraṇabhāvānatikramasiddhaye nirūpyate (IPV 1, 5, 7, vol. 1, p. 227).
- 12) iyati ca āśriyamāṇe yogī kumbhaṃ nirmimāṇaḥ kumbhakāraprasiddhasamastasāmagrisamarjanapurāḥsaram ghaṭaṃ ghaṭāyan kumbhakāra eva syāt (ibid.)
- 13) bhagavān bhūribhargo mahādevo niyatyanuvartanollaṅghanaghanatarasvātantryaḥ, ity atra pakṣe niyatyanuvartinaḥ laukike prasiddhe kāryakāraṇabhāve svātantryaṃ, tadullaṅghanam ādriyamāṇasya tu yogiprāyaprasiddhe lokottare (IPV 2, 4, 10, vol. 2, pp.172-173).
- 14) 自然法則が推理の根拠となる論理的必然関係の基盤であるから, それに反する yoginirmāṇa は因になりえないという議論がこのあと展開される。別稿を期する。

〈キーワード〉 ヨーガ, カシミール・シヴァ派, nirmāṇa

(東方研究会専任研究員)